

福島の声聴く

～福島県立相馬高校放送局の震災後の活動と『今伝えたいこと(仮)』～

湯本優希 (文学研究科日本文学専攻博士課程後期課程)

2012年3月に初演された福島県立相馬高校放送局の『今伝えたいこと(仮)』は、高校生たちが、お互いに震災への思いを持ち寄ってつくられた作品。本上映会(2013年9月8日、立教大学)では、相馬高校放送局顧問の渡部義弘氏をお招きし、作品の創作過程や上演・上映先での反応、生徒の変化など、震災後の活動についてお話しいただきました。ここでは、当日参加した学生によるレポートを掲載します。

東日本大震災から1年後、東京・笹塚で初演された、『今伝えたいこと(仮)』。この作品は、福島県立相馬高等学校放送局の女子高校生たちが東日本大震災における地震や津波、原発事故に対する苦しみや悲しみ、恐れ、将来への不安を演劇という形で訴えたものです。彼女たちの等身大の「高校生の声」は大きな反響を呼び、各地で上演や上映会が行われてきました。そうした震災後の福島の現状を伝える活動により、彼女たちは高校生として初めて2013年度JCJ特別賞(日本ジャーナリスト会議)を受賞しました。今回の上映会では、『今伝えたいこと(仮)』をはじめ、相馬高校放送局の計7つの音声・映像作品が上映され、顧問の渡部義弘先生が作品ごとに解説をしてくださいました。

まず最初に聞いたのは、詩人である若松丈太郎氏の「みなみ風吹く日」という詩の朗読です。この詩は東日本大震災以前に発表されたものですが、すでに原発事故を危惧し、未来へ警鐘を鳴らしている作品でした。

続いて、相馬高校放送局制作による作品の上映が始まりました。震災後の混乱を音声でつづった『(non) fiction』という作品の中で、はっとさせられたのは「東日本大人災」という言葉です。「放射線量はただちに人体に影響を及ぼす値ではない」「爆発的現象」など、当初、原発について説明された言葉はあまりに曖昧でした。そういった無責任な言葉が更なる混乱を招いたことを考えると「東日本大人災」という言葉はとて恐ろしくかつ的確な表現ではないでしょうか。

次に上映されたのは『今伝えたいこと(仮)』の最終公演(2013年3月)の映像でした。タイトルの「(仮)」は、彼女たちの伝えたいことが状況に応じて変化していくからという理由で付けられ、脚本や演出、手直しに至るまで彼女たち自身が手掛けた作品です。女子高校生3人組の一人、ひときわ明かった望美が自殺してしまい、残された麻希と桜の不安が一気に溢れます。望美は震災で家族を亡くし、親戚の家での生活やインターネット上の福島への誹謗中傷に苦しんでいました。そんな望美の辛さを知り、麻希と桜は「将来、結婚や出産の際に放射能の影響といった差別を受けたら」と不安をこぼします。麻希の「私たちの話を聞いてください! 子どもの訴えを無視しないでください!」という叫びや、自殺をした後の望美が登場する場面での「誰か私たちを助けてよ」という涙ながらの訴えに、未来を担う高校生の悲痛な声を決して軽視してはいけないと強



く感じました。また、3人が不安を吐露しているのに対し、一方で震災の話題がタブー視される描写もあり、「被災者」として一括りに考えるのではなく、震災に対して個々の思いや向き合い方があることを知るべきなのだと気付かされました。

震災後の通学路を撮影した『つなみのあと』や、出産や健康についてインタビューを行った『Is this?』、将来への潜在的な恐怖がうかがえながらも明るく生きようとする女子高生たちの姿が収められた『Girl's Life in Soma』。これらの作品も、女子高校生の視点から見た震災後の現状を伝えてくれました。最後の作品『相馬高校から未来へ』には、「考え続けることを止めてはいけない、大切なのは考え続けること」という結論を出した彼女たちの未来へ向かう強い意志がありました。しかし、彼女たちをたたえるばかりで終わってはいけません。私たちも一人一人が考え続けていかなければならないのです。

【当日の上映作品】

- ①「みなみ風吹く日」(若松丈太郎 鈴木夏歩朗読)
2011年8月録音
 - ②「(non) fiction」(ラジオドラマ) 2012年6月制作
 - ③「今伝えたいこと(仮)」(公演映像) 2012年3月初演/
上映は2013年3月の最終公演版
 - ④「つなみのあと」(テレビドキュメント) 2011年6月制作
 - ⑤「Is This?」(ラジオドキュメント) 2012年6月制作
 - ⑥「Girl's Life in Soma」(テレビドキュメント) 2012年6月制作
 - ⑦「相馬高校から未来へ」(テレビドキュメント) 2013年6月制作/
第60回NHK杯全国高校放送コンテスト・テレビドキュメント部門優勝作品
- (※初出は大学公式サイト「講演会レポート」〈2013年度〉
http://www.rikkyo.ac.jp/feature/lecture_report/)